

<翻訳>

チャン・ドンウ

張東宇 「朝鮮における『朱子家礼』研究」

CHANG Dong-woo, “*Studies of Family Rituals of Master Zhu in Choson Period*”

ビョン・ヨンホ ジョン・ジェサン  
邊 英浩 鄭 宰相 [訳]

BYEON Yeong-ho, JUNG Jae-sang

解題

これまでの朝鮮思想史の叙述において、17世紀は「礼学の時代」と性格づけられてきた。この説を最初に言い出したのは、おそらく玄相允の『朝鮮儒学史』(1949)であろう。玄相允の『朝鮮儒学史』は、植民地時代以降のものとしては、最初の朝鮮儒学通史であるが、そこでは朝鮮儒学の流れを「至治主義儒学→性理学→礼学→経済学(実学)」と述べている。この捉え方は、後の研究に大きな影響を与え、朝鮮時代の儒学は「16世紀=理学、17世紀=礼学、18世紀=実学」のように展開したもの、という「理解・知識」として定着する。つまり、16世紀における退溪学派と栗谷学派の性理学に対する見解の差が、17世紀において礼学に対する見解の差を生み出し、栗谷学派に属する西人は『朱子家礼』を中心とする礼論を、退溪学派に属する南人は古礼中心の礼論を展開した、という見方が朝鮮思想史ないし礼学史の叙述においてほぼ通説となっているのである。

例えば、韓国精神文化研究院で刊行された『韓国民族文化大百科事典』(全28冊)の「礼訟」の項目をみると、「栗谷学派である西人=家礼中心=守朱子学派」対「退溪学派である南人=古礼中心=脱朱子学派」という図式で説明がなされている。『韓国民族文化大百科事典』は研究者をはじめ一般人もよく利用する事典であるため、この図式的な理解は一般的な認識として根強く広まっている。17世紀の思想史・礼学史に対するこのような理解は、18世紀の朝鮮思想史の理解にもつながり、18世紀を「実学の時代」と規定し、「南人」系列の学者に焦点を当てながら、実学を「脱朱子学的」学問として位置づける言説と密接に結び付いている。

このような状況の中で、17世紀の朝鮮思想史・礼学史に対する従来の研究に問題を提起し、新しい見方を提示する研究者たちが近年現れている。本稿の著者である張東宇氏(韓国、延世大学校国学研究院研究教授)もその一人である。氏は、朝鮮時代の代表的な思想家の一人である茶山、丁若鏞の礼学の研究で博士論文(『茶山礼学の研究—『儀礼』『喪服』篇と『喪礼四箋』『喪期別』の比較を中心に』延世大学校、1997年)を著して以来、長年朝鮮礼学の研究に取り組んできた韓国の学者であるが、特に近年は朝鮮時代の『朱子

家礼』関連著述の研究を精力的に行っている。

本稿で氏は、朝鮮時代の『朱子家礼』関連著述に対する書誌学的な調査・分析を通じて、朝鮮における礼学の展開は、『朱子家礼』の研究が始まった16世紀後半から18世紀にいたるまで、「古礼による『朱子家礼』の補完」という共通の問題意識をもとに、学派の相違を超えて「蓄積的に進展された単一流れ」であると結論づける。また「礼学の時代」といえるのは、17世紀であるというより、むしろ18世紀であるという見解を示す。これまでの朝鮮礼学の研究は、主に17世紀の服制論争（礼訟）史料を中心に行われてきたわけであるが、著者は朝鮮礼学史における家礼関連資料の持つ重要性を提示し、朝鮮礼学史の叙述は礼訟にとどまらず、もっと広い見地から捉えるべきであることを示唆しているのである。朝鮮礼学史への新しい視点を提供し、従来の朝鮮思想史の理解に反省をうながしている点で、著者の問題提起と結論は非常に大きな意味を持つものと思われる。また本稿で整理された膨大な量の『朱子家礼』関連著述リストは、朝鮮礼学史の研究のみならず、今後、中国・日本・ベトナムなど、東アジア各地における家礼文化の比較研究の基礎資料として活用できるものと期待される。翻訳は鄭宰相（京都大学講師）が草案を作成し、邊英浩（都留文科大学教授）が点検し責任を負うこととした。なお本稿は筆者が、科学研究費補助金（基盤研究（A））研究「東アジアにおける朝鮮儒教の位相に関する研究」（研究代表者：井上厚史島根県立大教授）の一環として弘前大学で行なわれた国際ワークショップ（2012年8月29～30日）において報告したものを加筆、修正したものである。

## Abstract

It has been said that the two opposite stances exist in Chosŏn scholars' studies on *Family Rituals of Master Zhu* (*Zhuzi Jiali* 朱子家禮). Unlike the previous understanding of the irreconcilable difference between Yulgok 栗谷 school and Toegye 退溪 school, this article unveils their common consent that they endeavored to complete Zhuzi's *Family Rituals* in accord with the ancient ritual principles. On the ground of such agreement, Ritual Studies of the two schools had interacted with each other, mainly in respect of three aspects: practice of rituals (haengnye 行禮), interpretations or exegeses on those practices, and provisional/extraordinary rituals without clear manuals in the canonical scriptures (byŏllye 變禮). Through exploring extant 198 works of Chosŏn Ritual Studies in the 15th to 19th centuries, this article shows the patterns of their evolution and interrelationship.

## 1. 緒言

朝鮮において『朱子家礼』の本格的な研究は16世紀後半から始まる。『朱子家礼』についての最初の註釈書とされる金麟厚キム・リンフの「家礼考誤」は1550年頃に書かれた。李滉イ・ファンが弟子たちと『朱子家礼』について講論し、それを『家礼講録』・『家礼註解』としてまとめたのは1570年頃であり、本格的な家礼註釈書と評価される宋翼弼ソン・イクピルの『家礼註説』が出たのは1590年頃、そして体裁と内容の両面において完整した註釈書である金長生キム・ジャンセンの『家礼輯覽』は

1599年に著述された。

『朱子家礼』に対する研究は、表面的には、三つの要因によって触発された<sup>1</sup>。

第一に、書物としての『朱子家礼』の普及と拡散である。朝鮮に普及した『朱子家礼』の主な版本は『性理大全』本である。中国で刊行されてから約100年後に、朝鮮では甲寅字本の『性理大全』が刊行され（1531年）、その後も慶州（1537年）、済州（1644年）、全州（1744年）において木版本が刊行される。このように『性理大全』が続刊された原因の一つは、『朱子家礼』に対する需要の増加であり、そのような傾向は『性理大全』から『家礼』の部分だけを抜き出して刊行した『家礼大全』本（1563年）の出現からも確認される。

第二に、『儀礼経伝通解』の輸入と普及である。『儀礼経伝通解』は、太祖代に『經濟六典』を編纂する時にすでに参照され、同時代の王朝儀礼の整備において多く利用された。しかし、1567年（宣祖即位年）以前に本書を刊行した記録はない。1567年から1570年の間に木活字が混入された甲寅字本の前集が刊行され、1571年4月には続集が印出された。その後大邱と全州において木版本が作られた（1740年以前）<sup>2</sup>。『儀礼経伝通解』の普及と拡散は、『家礼』は朱子の初期著作であるので、晩年の定論によって補わなければならない」という問題意識、すなわち「古礼である『儀礼』と『礼記』に基づいて『家礼』を補完すべきである」という意識を朝鮮の儒者たちに喚起させた。

第三に、中国から流入し、1518年に乙亥字で刊行した『家礼儀節』の流通である。『家礼儀節』は、以後、清州（1555年）、靈光（1626年）において版刻された。『家礼儀節』の普及と流通は、版本の側面においては、四巻本である『性理大全』本・『家礼大全』本が中心であった状況の中で、七巻本という新しいテキストを出現させる契機となり、研究の側面においては、古礼と北宋礼制の「考証」によって『朱子家礼』を理論的に補完し、「儀節」（儀式次第についての詳細な規定）を定め行礼の便宜をはかり、改葬・返葬などの儀式を追加し「変礼」（既存の礼書に明文規定がないため、礼の精神に照らして新たに儀式を定めること）に応じるべきである、との問題意識を呼び起こした。

本論文は、16世紀後半から本格的に現れる『朱子家礼』の研究成果を概括しながら、朝鮮における『朱子家礼』研究の特徴および朝鮮礼学の展開を通時的に検討することより、朝鮮時代の家礼研究に新しい視点と方法を提示するものである。特に、従来の研究が学派中心に礼学史を叙述してきたのに対し、本稿では学派を超える共通の問題意識を解明することに焦点をあてる。これは17世紀以後の朝鮮の礼学は、基本的に古礼の精神に基づいて『朱子家礼』を補完することを共通に追求しているのみならず、その研究が始まった当初から「古礼に基づいて『家礼』を補完する」との問題意識のもとで研究が進められたからである。

## 2. 朝鮮時代の『朱子家礼』研究成果<sup>4</sup>

### 2.1. 十五～十六世紀

15～16世紀における『朱子家礼』関連著述は、合計62種（散佚した31種を含む）である。これを表に整理すると以下のとおりである。

書名 <sup>5</sup>	著者(編者)	生年	没年	成書年代 <sup>6</sup>	卷冊	備考 <sup>7</sup>
大夫士廟祭儀	李崇仁	1347	1392	1387	3張	
詳節家礼	権 近	1352	1409	未詳		佚
葬日通要	鄭以吾	1347	1434	1419	13張	
喪祭弁説	許 稠	1367	1439	未詳		佚
祭儀・墓祭儀	金叔滋	1389	1456	未詳	4張	
祭礼	李賢輔	1467	1555	1547	4張	
奉先雜儀	李彦迪	1491	1553	1550	2卷1冊	叢書
家礼考誤	金麟厚	1510	1560	1550?	2張	
士喪礼節要	曹 植	1501	1572	1560?		佚
行祀儀節	宋麒寿	1507	1581	1570?	3張	
喪礼問答	具鳳齡	1526	1586	1570?	4張	
家儀	宋 寅	1516	1584	1570?		佚
四礼集説	朴枝華	1513	1592	1570?		佚
家礼講録	李 滉(金 隆)	1501	1570	未詳	1卷	
家礼註解	李 滉(李徳弘)	1501	1570	未詳	1卷	
溪門礼説	李 滉(金士貞)	1501	1570	未詳		佚
退溪先生喪祭礼答問	李 滉(趙 振)	1501	1570	未詳	1冊	叢書
二先生礼説	李 滉(李惟樟)	1501	1570	未詳	2卷2冊	叢書
李先生礼説	李 滉(李 瀾)	1501	1570	未詳		佚
溪書礼輯	李 滉(林応声)	1501	1570	未詳	2卷1冊	叢書
退溪先生喪祭礼説	李 滉(?)	1501	1570	未詳	2冊	
退溪喪祭礼答問分類	李 滉(?)	1501	1570	未詳	1冊	
退溪先生礼説問答	李 滉(?)	1501	1570	未詳	1冊	
家礼集覽補註	鄭 述	1543	1620	1573		佚
家礼増解	柳仲郢	1515	1573	未詳		佚
冠婚撮要	朴而章	1547	1622	1576		佚
祭儀鈔	李 珥	1536	1584	1577	12張	
婚儀	鄭 述	1543	1620	1579		佚
家礼考証	邊以中	1546	1611	1579	4卷	佚
四礼要解	姜 濂	1544	1606	1580?		佚
追遠雜儀	柳雲竜	1539	1601	1580?	8張	
喪礼抄	劉希慶	1545	1636	1580?		佚
礼経要語	安余慶	1538	1592	1580?	1冊	
家礼解義問答	安余慶	1538	1592	1580?		佚
玉川安先生礼説	安余慶	1538	1592	1580?		佚
喪祭要録	安 璫	1519	未詳	1580?		佚
疑礼問答	金宇顛	1540	1604	1580?		佚
家礼疑義	趙 穆	1524	1606	1580?	1張	
喪礼考証	金誠一	1538	1593	(1581)	3卷3冊	叢書
冠儀	鄭 述	1543	1620	1582		佚
講礼答問	禹伏竜	1547	1613	1582		佚
喪礼通載	申義慶	未詳	未詳	1583以前	5卷2冊	

喪礼備要	金長生	1548	1631	1583	2巻1冊	叢書
喪礼抄	李廷毓	1541	1600	1584?		佚
四礼記聞	琴輔	1521	1585	未詳		佚
四礼正変	琴輔	1521	1585	未詳		佚
朱門問礼	辛応時	1532	1585	未詳	2冊	
喪礼要略	朴承任	1517	1586	未詳		佚
四礼弁解	朴承任	1517	1586	未詳		佚
疑礼講録	朴承任	1517	1586	未詳		佚
家礼筭録	李慎儀	1551	1627	1587	25張	
奉先諸規	金誠一	1538	1593	1587	3張	
雜儀輯録	権好文	1532	1587	未詳	1巻	
礼説総論	申渚	1544	1589	未詳		佚
婚儀	張顯光	1544	1637	1590?	11張	
冠儀	張顯光	1544	1637	1590?	13張	
家礼註説	宋翼弼	1534	1599	1590?	3巻	
喪祭雜儀	沈守慶	1516	1599	1590?		佚
家礼便考	権文海	1534	1591	未詳		佚
家礼輯覧(図説)	金長生	1548	1631	1599	12巻6冊	叢書
喪祭礼	安璐	1519	未詳	未詳		佚
竹溪雜儀	安璐	1519	未詳	未詳		佚
15～16世紀 総62種(散佚31種)						

16世紀の『朱子家礼』研究に現れる特徴は、初歩的な行礼指針書の性格をもつ著述が、全体の半数を占めることである。例えば、李賢輔<sup>イ・ヒョンボ</sup>の「祭礼」は祭需(供え物)の陳設図を中心に『朱子家礼』の該当部分を要約した祭祀指針書であり、曹植<sup>チョ・シク</sup>の「士喪礼節要」はその題目どおり、士の喪礼のための行礼指針書である。同じ性格の著述としては、『奉先雜儀』、「行祀儀節」、「家儀」、「冠婚撮要」、「祭儀鈔」、「婚儀」、「追遠雜儀」、「喪礼抄」、「冠儀」、「奉先諸規」、「喪祭雜儀」、「喪祭礼」、「竹溪雜儀」などがある。これらは、この時期が『朱子家礼』に従い、喪礼・祭礼を中心に標準的な儀式次第を定めようと苦心した時期であることを物語る。

『退溪先生喪祭礼答問』は、門人の趙振が、『退溪集』に収録されている退溪とその門人たちの問答の中から、喪祭礼に関係する部分を取り出して集めたものである。喪礼に関係するのが231条、祭礼関係が152条、その他19条など、合計402条の問答を収めている<sup>\*</sup>。議論の対象となっているのは、いうまでもなく『朱子家礼』である。論議の内容は、『朱子家礼』の記事を註解したり、考証したりするものもあるが、『朱子家礼』に明文規定のない事柄に関する質疑応答が中心となっている。「疑礼問答」、「講礼答問」などはすでに散佚し、その内容を確認することはできないが、『退溪先生喪祭礼答問』に類似する性格を持つものと考えられる。この「問答」類の著述は、『朱子家礼』を実施する際に『朱子家礼』に明文規定がないため、新たに儀式を定めようとした議論である点で、「変礼書」の性格を有するものである。

退溪は弟子たちとともに『朱子家礼』について講論を行ったが、それが『家礼講録』と『家礼註解』として残っている。この二つの書物は、『朱子家礼』をそのまま実践するレ

ベルを超え、学問的に理解・研究しようと努力する初期的な様子を窺わせる。『朱子家礼』を補完したり、改正しようとするより、用語について簡単な解釈を行ったり、漢字で表現できない用語をハングルで示したりするなど、読者の理解を助けることに焦点が当てられている。また、<sup>キム・ソンイル</sup>金誠一の「喪礼考証」は『朱子家礼』に載せる喪祭礼の淵源を、古礼の『礼記』にまで遡って求めた著述である。この意味で、この三つの著述は、『朱子家礼』について注解・考証を施した註釈書にあたる。同様のものとしては、「家礼考誤」、『四礼集説』(佚)、『家礼集覧補註』(佚)、『家礼増解』(佚)、『家礼考証』(佚)、『朱門問礼』、『礼説総論』(佚)、『家礼註説』などがある。

金長生の『喪礼備要』と『家礼輯覧』は16世紀を代表する著述である。『喪礼備要』は、行礼の便宜をはかり、儀式の次第とそれに必要な器物を具体化し、分かりやすい用語と概念で解説するに止まらず、『朱子家礼』の欠落を古礼の明文によって補い、行礼の完結性を高めようとした行礼書である。『喪礼備要』は本文の前に喪礼に必要な様々な道具をあげ、その用途や材質などについて説明している。『家礼輯覧』は、『喪礼備要』が行礼の便宜に焦点をあてているのに対し、『朱子家礼』の文献的な完全性の確保、すなわち『朱子家礼』の記事の意味を文献的に考証・注解するところに重点をおいた註釈書である。

## 2.2. 十七世紀

17世紀の『朱子家礼』関連著述は、合計82種(散佚した39種を含む)である。これを表に整理すると以下のとおりである。

書名	著者(編者)	生年	没年	成書年代	巻冊	備考
喪礼考証	柳成竜	1542	1607	1602	3巻1冊	叢書補
五先生礼説分類	鄭述	1543	1620	1603	20巻7冊	叢書
養正篇	鄭経世	1563	1633	(1604)	1冊	
家礼考証	曹好益	1545	1609	未詳	7巻3冊	叢書
家礼僭疑	権得己	1570	1622	1610	1巻	
疑礼考証	申湜	1551	1623	1610?		佚
家礼剥解	李芬	1566	1619	1610?		佚
家礼喪祭図説	崔東立	1557	1611	未詳		佚
四礼解義	南慶薫	1572	1612	未詳		佚
四礼訓蒙	李恒福	1556	1618	1614	1冊	叢書
礼記喪礼分類	鄭述	1543	1620	1615		佚
五服沿革図	鄭述	1543	1620	1617	1冊	叢書
贅漢礼輯	孫起陽	1559	1617	未詳		佚
寒岡先生四礼問答彙類	鄭述(鄭煌)	1543	1620	未詳	4巻2冊	叢書
疑礼問解	金長生	1548	1631	1620?	4巻4冊	叢書
疑礼問解拾遺	金長生	1548	1631	1620?	1巻1冊	叢書
奉先抄儀	趙任道	1585	1664	(1621)	1冊	叢書補
家礼補解	沈光洙	1598	1622	未詳		佚
喪礼諺解	李鸞寿	1550	未詳	1623	2巻1冊	
家礼諺解	申湜	1551	1623	未詳	10巻4冊	叢書
五服通考	申湜	1561	未詳	(1625)	9巻2冊	

家礼附贅	安 玗	1569	1648	1628	6 卷 3 冊	叢書
家礼附解	琴是養	1598	1663	(1628)		佚
疑礼問解	李厚慶	1558	1630	未詳	2 卷	佚
思問録	鄭經世	1563	1633	未詳	1 卷	
喪礼参考	鄭經世	1563	1633	未詳		佚
先礼類輯	鄭經世(鄭宗魯)	1563	1633	未詳	6 卷 3 冊	佚
冠礼訓辭	鄭 湛	1552	1634	未詳		佚
家礼附解	安 埏	1574	1636	(1634)	3 卷	佚
郷飲酒礼笏記考証	李 竣	1560	1635	未詳	1 冊	
四礼儀	宋時栄	1588	1637	未詳	8 卷 8 冊	
喪制手録	張顯光	1554	1637	未詳		佚
喪礼手録	張顯光	1554	1637	未詳		佚
旅軒先生礼説	張顯光(?)	1544	1637	未詳	1 冊	
家礼源流	兪 槩	1607	1664	1638	14 卷 9 冊	叢書
疑礼問解	姜碩期	1580	1643	1638	2 卷 1 冊	叢書補
四礼節解	曹以天	1560	1638	未詳		佚
家礼源流	尹宣拳	1610	1669	1642	18 卷 9 冊	叢書
礼叢要説	洪 錫	1604	1680	(1642)		佚
家礼源流統録	兪 槩	1607	1664	1643	2 卷 1 冊	叢書
疑礼問解統	金 集	1574	1656	1643	2 卷 1 冊	叢書
家礼郷宜	趙 翼	1579	1655	(1644)	7 卷 2 冊	叢書補
四礼問答	李滉・鄭述等(金応祖)	1587	1667	(1645)	4 卷 2 冊	叢書補
家礼疏義	李久澄	1568	1648	未詳		佚
冠婚喪礼	安 玗	1569	1648	未詳		佚
経礼類纂	許 穆	1595	1682	1649	5 卷 4 冊	叢書
古今喪礼異同議	金 集	1574	1656	1649	1 卷 1 冊	叢書
喪祭要録	洪 錫	1604	1680	(1651)	2 卷 1 冊	叢書補
疑礼聞見解	朴寿春	1572	1652	未詳		佚
家礼増撰	禹汝楸	1591	1657	未詳		佚
礼家附説	申 最	1619	1658	未詳		佚
家礼註解	李弘祚	1595	1660	未詳		佚
喪祭礼解(家礼諺解・家礼 喪葬祭三礼諺解)	安応昌	1603	1680	(1665)		佚
家礼附釈	李元鎮	1594	1665	未詳		佚
四礼質疑	南海準	1598	1667	未詳		佚
四礼笏記	李惟泰	1607	1684	1668	1 冊	
家礼源流本末	尹宣拳	1610	1669	未詳	2 卷 1 冊	叢書
礼疑答問分類	李益銓	未詳	1679	1672	18 卷 6 冊	
喪服考証	柳元之	1598	1674	(1673)	1 冊	
喪祭礼問答	孫処恪	1601	1677	未詳		佚
疑礼解	孫処恪	1601	1677	未詳		佚
諸礼質疑	金廈挺	1621	1677	未詳		佚
家礼節要	李而禎	1619	1679	未詳		佚
四礼集説	安応昌	1603	1680	未詳		佚

家礼要解	朴世采	1631	1695	1683	7巻1冊	叢書補
家礼増解	柳世禎	1617	1686	未詳		佚
家礼翼解	張万杰	1654	1687	未詳		佚
四礼儀式	洪昇	1612	1688	未詳		佚
疑礼通攷	宋時烈	1609	1689	未詳		佚
尤庵礼疑問答	宋時烈	1609	1689	未詳	11巻5冊	叢書補
尤庵先生礼説	宋時烈	1609	1689	未詳	2巻1冊	叢書補
六礼疑輯	朴世采	1631	1695	1690	33巻14冊	叢書
明斎先生疑礼問答	尹拯(?)	1629	1714	1690?	8巻4冊	叢書
三礼儀	朴世采	1631	1695	未詳	3巻1冊	叢書
四礼儀	朴世采	1631	1695	未詳	4巻1冊	叢書
南溪先生礼説	朴世采(金様)	1631	1695	未詳	20巻10冊	叢書
四礼変節	朴世采	1631	1695	未詳		佚
改葬儀	朴世采	1631	1695	未詳		佚
家礼外編	朴世采	1631	1695	未詳		佚
喪礼考証	権愷	1636	1698	未詳		佚
四礼綜要	李沃	1641	1698	未詳	7巻2冊	
沙明両先生問解	未詳				1冊	叢書
17世紀						総82種 (散佚39種)

『朱子家礼』の註釈書としては、退溪学派の場合は、『喪礼考証』、『家礼考証』、『疑礼考証』(佚)、『礼記喪礼分類』(佚)、『家礼補解』(佚)、『家礼附贅』、『家礼郷宜』、『家礼疏義』(佚)などがあり、栗谷学派の場合は、兪棨の『家礼源流』と『家礼源流続録』、尹宣挙の『家礼源流』、『家礼要解』などがある。

柳成竜の『喪礼考証』は、『朱子家礼』を中心に『礼記』の該当記事を載録し、また楊復の「儀礼服制図式」を該当条文の下に添付するものであるが、「変礼」の条項を設けているのが特徴である。

趙好益の『家礼考証』は、『朱子家礼』の中で難解な制度・器物・語句・人名などについてその出處を明らかにしたもので、経・史書から典拠をあげるとともに自分の意見を付け加え、後学の理解を助けようとした註釈書である。また、随所に図説をつけて理解の便を図っているが、図説の大部分は丘濬の『家礼儀節』を適用している。

安玘の『家礼附贅』は、『朱子家礼』の中から切要な部分を節録し、それに明代の礼制と丘濬の『家礼儀節』、そして朝鮮儒者の文集から関連する内容を採録して附記する体裁となっている。『朱子家礼』を補完するために追加した「儀節」は「【補】」の印の下に収め、変礼に対応させるべく先儒の礼説を抜粋・記録した「附贅別録」を付する。趙翼の『家礼郷宜』も『家礼附贅』の問題意識を受け継いだものであるが、名物度数の朝鮮化に焦点をあてている点で、「儀節」の補完するところに重点がおかれた『家礼附贅』とは差がある。

兪棨の『家礼源流』と『家礼源流続録』は、『朱子家礼』の「源」(淵源)と「流」(展開)を明らかにした著述である。すなわち、『儀礼』『礼記』『周礼』などの様々な経伝から『朱子家礼』の淵源を探るとともに、後世の礼説を蒐集し、『朱子家礼』の展開を解明



しようとしたものである。先述した金長生の『家礼輯覧』が、問題となる個所だけを抜粋し註釈を施しているのに対し、『家礼源流』は『朱子家礼』の本文、原註、附註に至るまでのすべてを記録して検討を行っている点、また『儀礼』『礼記』『周礼』などの古礼の内容をより豊富に活用している点で相違している。さらに『経国大典』、『五礼儀』、『奉先雜儀』、『退溪先生喪祭礼答問』、『栗谷集』、『龜峰集』、『家礼考証』、『喪礼備要』、『家礼輯覧』、『疑礼問解』など、それ以前の朝鮮儒者の研究成果を、学派を問わず反映している点で、最初の「朝鮮化した『朱子家礼』注釈書」と評価されている。

17世紀における家礼研究の特徴は、行礼の際に遭遇する「疑礼」・「変礼」問題への関心と省察を、独自の著述として整理・刊行した点にある。金長生の『疑礼問解』、姜碩期<sup>カン・ソッキ</sup>の『疑礼問解』、宋時烈<sup>ソン・シヨル</sup>の『尤庵礼疑問答』、尹拯<sup>ユン・ジュン</sup>の『明齋先生疑礼問答』などがそれにあたる。

金長生の『疑礼問解』は、既存の礼書に対する疑問点や、既存の礼書に記載のない変礼についての問答を集めたものである。内容の多くは、喪礼と祭礼に関するものである。姜碩期の『疑礼問解』は、金長生の『疑礼問解』の内容を補い、別集の形で刊行したものであり、『疑礼問解』と同じ性格の書物である。宋時烈の『尤庵礼疑問答』と尹拯の『明齋先生疑礼問答』もまた、『疑礼問解』と同じ体裁をとり、金長生と金集<sup>キム・ジブ</sup>の礼の問答書に記載がないか不十分な部分、新たに追加すべき部分を整理したものである。

簡便な行礼マニュアルを制作しようとする試みは17世紀にも続いた。李惟泰<sup>イ・ユテ</sup>の『四礼笏記』は、丘濬の『家礼儀節』の体裁に従い、冠婚喪祭の儀式を構成・説明したものである。その大部分は『家礼儀節』の内容を要約したものであるが、朝鮮の風俗と異なる部分は朝鮮の実情に適するように改変している。各篇末には「註釈」「引証」「儀節」を付し、本文の内容を補っている。朴世采<sup>パク・セチエ</sup>の『三礼儀』は、主に喪礼だけを論じている『喪礼備要』を補うために著述されたもので、「冠礼儀」・「昏礼儀」・「祭礼儀」の三つの部分から構成される。その体裁は基本的に『朱子家礼』に基づいているが、細部項目においては『儀礼』『家礼儀節』『奉先雜儀』『擊蒙要訣』『国朝五礼儀』『喪礼備要』を反映している。

### 2.3. 十八世紀

18世紀における『朱子家礼』関連著述は、合計97種（散佚した42種を含む）である。これを表に整理すると以下のとおりである。

書名	著者(編者)	生年	没年	成書年代	巻冊	備考
家礼輯解	申夢参	1648	1711	(1702)	9巻5冊	叢書
家礼或問	鄭碩達	1660	1720	1703	10巻5冊	叢書補
礼儀補遺	鄭 鎭	1634	1717	(1708)	2巻	叢書
家礼通解	李天相	1637	1708	未詳	11巻5冊	
家礼輯説	柳慶輝	1652	1708	未詳	6巻3冊	叢書
五礼輯略	権以時	1631	1708	未詳	6巻3冊	叢書補
家礼筭疑	鄭万陽	1664	1730	(1710)		佚
癸巳往復書	兪相基	1651	1718	1713	1冊	叢書
家礼附録	李衡祥	1653	1733	(1714)	3巻1冊	叢書
家礼疏義付籤	韓元震	1682	1751	1715	1巻	

改葬備要	鄭万陽・鄭葵陽	1664	1730	(1715)	1冊	叢書
變礼集說	權尚精	1644	1725	(1715)	3冊	
家礼考証	柳世彰	1657	1715	未詳	3卷	
二礼補考	李之炫	1639	1716	未詳	2卷2冊	
家礼翼解	張万杰	1654	1717	未詳		佚
疑礼問答	張万杰	1654	1717	未詳		佚
桐湖礼說	李世弼	1642	1718	未詳		佚
答問疑礼	李世弼	1642	1718	未詳		佚
礼書簡記	南道振	1674	1735	(1719)	26卷13冊	叢書
家礼伝注	權泰時	1635	1719	未詳		佚
礼說輯録	宋徽殷	1652	1720	未詳		佚
寒水齋先生礼說	權尚夏(?)	1641	1721	未詳	1冊	
四礼纂說	李 焯	1661	1722	未詳	8卷4冊	叢書補
疑礼類說	申 近	1694	1764	(1723)	11卷5冊	叢書
家礼簡疑	李喜朝	1655	1724	未詳	11張	
四礼集說	張 瑠	1649	1724	未詳		佚
喪礼要覽	張 瑠	1649	1724	未詳		佚
家礼便考	李衡祥	1653	1733	(1725)	14卷	叢書
四礼考証	安晋石	1644	1725	未詳	5卷2冊	叢書補
家礼或問	李衡祥	1653	1733	(1727)	18卷	叢書
礼說輯録	鄭榮振	1672	1728	未詳		佚
疑礼類聚	金尚鼎	1668	1728	未詳	1冊	
礼說類編	金時泰	1647	1729	未詳		佚
星湖家礼疾書	李 暎	1681	1763	(1731)	3卷3冊	叢書
五服便覽	權 綽	1658	1730	未詳	7卷4冊	叢書補
東儒礼說	金 幹	1646	1732	未詳		佚
深衣考証	金 幹	1646	1732	未詳		佚
疑礼通攷	鄭万陽・鄭葵陽	1667	1732	未詳	15卷7冊	叢書
家礼凶說	李衡祥	1653	1733	未詳		佚
家礼訓蒙	李衡祥	1653	1733	未詳		佚
礼書類編	孫汝濟	1651	1740	(1734)	12卷6冊	
四礼疑義問答類編	李命培	1672	1736	未詳		佚
四礼訂疑	李命培	1672	1736	未詳		佚
家礼積義	孫汝濟	1651	1740	未詳	2冊	
四礼纂要	孫汝濟	1651	1740	未詳		佚
喪祭輯略	權舜經	1676	1744	(1741)	4卷2冊	叢書補
喪礼記疑	申正模	1691	1742	未詳		佚
四礼輯要	權万斗	1674	1753	(1744)	6卷2冊	叢書補
四礼便覽	李 緯	1680	1746	未詳	8卷4冊	叢書
陶巖疑礼問解	李 緯	1680	1746	未詳	1冊	叢書補
家礼附解	李 集	1672	1747	未詳		佚
決訟場補	李象靖(李秉遠)	1711	1781	1748	10卷5冊	叢書
家礼輯解	南濟明	1668	1751	未詳		佚

家礼源流疑録	韓元震	1682	1751	未詳	1 卷	
家礼輯要	鄭重器	1685	1757	(1752)	7 卷 3 冊	叢書補
礼儀講録	邊尚綏	1696	1757	未詳		佚
礼疑類輯	朴聖源	1697	1767	(1758)	28卷15冊	叢書
家礼叢説	南国柱	1690	1759	未詳		佚
星湖礼式	李 瀾(李秉休)	1681	1763	未詳	1 冊	叢書
星湖礼説類編	李 瀾(李秉休)	1681	1763	未詳	7 卷 7 冊	叢書補
礼儀講録	邊尚綏	1696	1767	未詳		佚
家礼附疑	金善鳴	1691	1769	未詳		佚
喪礼便覧	金鼎柱	1724	未詳	1771	2 卷 2 冊	叢書
喪礼釈疑	申思勉	1706	1772	未詳		佚
四礼正変	金景游	1689	1773	未詳	14卷 7 冊	叢書補
家礼輯遺	金泰濂	1694	1775	未詳	20卷 7 冊	
礼家指南	李弘象	1701	1778	未詳		佚
喪礼輯解	鄭師夏	1713	1779	未詳	2 卷 1 冊	
冠礼考定	徐昌載	1726	1781	1779	1 冊	叢書
家礼集考	金鍾厚	1721	1780	(1779)	8卷8冊	叢書
家礼輯解	徐昌載	1726	1781	未詳		佚
四礼常変通攷	李象靖	1710	1781	未詳		佚
常変通攷	柳長源	1724	1796	(1783)	30卷16冊	叢書
永陽家礼	李翼竜	1732	1784	(1783)		佚
家礼問疑	洪大容	1731	1783	未詳		佚
五服名義	兪彦鏞	1714	1783	未詳	3 卷 3 冊	叢書
家礼通編	李翼竜	1732	1784	未詳		佚
家礼酌通	朴思正	1713	1787	未詳	6 卷 4 冊	
疑礼新編	朴忠源	1735	1787	未詳		佚
喪礼抄	成啓宇	1724	1788	未詳		佚
五礼考証	安 業	未詳	未詳	(1789)	36卷20冊	
二礼笏記	尹東暹	1710	1795	(1790)	6 卷 3 冊	
四礼類会	李遂浩	1744	1797	(1790)	4 卷 4 冊	叢書
溪山礼説類編別集	李野淳	1755	1831	(1790)		佚
四礼便考	柳道源	1721	1791	未詳	2 冊	
家礼翼箋	安鼎福	1712	1791	未詳		佚
家礼詳解	安鼎福	1712	1791	未詳		佚
家礼集解	安鼎福	1712	1791	未詳		佚
家礼増解	李宜朝	1727	1805	(1792)	14卷10冊	叢書
疑礼瞥見	柳長源	1724	1796	未詳		佚
安陵世典	李周遠	1714	1796	未詳	7 卷 3 冊	叢書
家礼輯遺	李宗洙	1722	1797	未詳		佚
四礼類会図式	李遂浩	1744	1797	未詳	29張	
家礼増解疑義問答	李遂浩	1744	1797	未詳		佚
礼疑笱記	康 達	1714	1798	未詳	1 冊	叢書
近斎礼説	朴胤源	1734	1799	未詳	8 卷 4 冊	叢書

礼儀常変	柳春栄	1673	未詳	未詳		佚
18世紀 総97種 (散佚42種)						

18世紀は、専門的な家礼註釈書が多く著される点において、表面上17世紀とそれほど変わらない。「家礼〇〇」と冠する著述の中で、『家礼輯解』、(鄭碩達)<sup>チョン・ソクタル</sup>『家礼或問』、(鄭万陽)<sup>チョン・マンヤン</sup>『家礼筭疑』、『家礼附録』、『家礼考証』、『家礼伝注』、『家礼便考』、(李衡祥)<sup>イ・ヒョンソク</sup>『家礼或問』、『星湖家礼疾書』、『家礼訓蒙』、『家礼酌通』などは、広い意味で、退溪学派に属する学者の著述であり、(李喜朝)<sup>イ・フイジョ</sup>「家礼筭疑」、『家礼増解』、『家礼集考』だけが栗谷学派の著述に分類される。これは栗谷学派においては専門的な註釈書を作る必要性が減ったのに対し、退溪学派の場合はその必要性が高かったことを示す。

李喜朝の「家礼筭疑」は、『家礼』に対する疑問事項を記録した短い文章である。金鍾厚<sup>キム・ジョンフ</sup>の『家礼集考』は『朱子家礼』の本文・原註・附註を載せ、それに対して三礼をはじめとする諸家の礼説を分類収録し、自分の見解を書き加えたものである。巻八には附録として「変礼」が載せられているが、宋時烈・宋翼弼など、主に栗谷学派の礼説を収録している。

鄭碩達の『家礼或問』は、冠・婚・喪・祭と雑礼の分類を設け、四礼の場合は『朱子家礼』において議論となった内容を項目化し、それに関連する中国学者の説とともに朝鮮学者の説をも問答形式で収録した。李衡祥の『家礼便考』は、『朱子家礼』の内容と体裁に従い、疑問に思う条目と敷衍説明が必要な部分に、中国と朝鮮の学者の説を引用している。『家礼附録』は『家礼便考』の続篇であり、『家礼或問』は四書或問のごとく、『朱子家礼』の中で問題となる語句について或人が問いを発し、それに対して筆者が答える形式となっている。孫汝済<sup>ソン・ヨジエ</sup>の『家礼積義』は伝わらないが、彼が著した「家礼積義識」によると、これは退溪の手沢本『家礼』に書かれている頭註をもとにして関連する資料を蒐集したもので、つまり退溪の遺説を中心に自分の見解を付け加えた著述である。

16世紀から持続された「行礼書」制作の努力は、李緯<sup>イ・ジエ</sup>の『四礼便覧』と鄭重器<sup>チョン・ジュンギ</sup>の『家礼輯要』として実った。李緯の『四礼便覧』は、『朱子家礼』の冒頭にある「通礼」の祠堂章を、「祭礼」の前に移した。これは、喪礼の最後に「祠堂之儀」を置き、そこに祠堂章の内容を移してから祭礼を叙述する『喪礼備要』の体裁を受け継いだものである。このように『四礼便覧』は、本文の再配置と儀節の補完によって行礼の便をはかる『喪礼備要』の問題意識を全面的に受容した行礼書であった。

鄭重器の『家礼輯要』は、丘濬の『家礼儀節』と金長生の『喪礼備要』の持つ体裁上の問題を改める目的で書かれた。つまり、『家礼輯要』は『喪礼備要』によって崩れた『朱子家礼』の体裁を復元し、「祠堂章」、「深衣制度」、「居家雜儀」の悉くをもとどおりに戻す。冠礼と昏礼については師匠鄭葵陽の「遺儀」を活かしながらも『喪礼備要』の体裁を維持し、喪礼と祭礼については『喪礼備要』の註釈を批判的に再構成した。『四礼便覧』が『朱子家礼』の体裁から脱した「四礼式の『喪礼備要』」であれば、『家礼輯要』は『朱子家礼』の体裁を遵守している「朱子家礼式の『喪礼備要』」であるといえよう。

「疑文」と「変礼」に対する関心と省察が、①「問答」の形式を脱して独自の礼書の形で整理されたり、②著述の中に編入・収録されたりする点で18世紀は17世紀と差がない。ただし、18世紀になると、収録された内容が広範になり、参照の便をはかり分類の形式を

とる編集が行われる点で、両時期の間に差が認められる。①の例としては『礼疑類輯』、『疑礼類説』があり、②の例としては『家礼増解』、『常変通攷』がある。『礼疑類輯』(①)と『家礼増解』(②)は栗谷学派の著作であり、『疑礼類説』(①)と『常変通攷』(②)は退溪学派の著作である。これらの例から、この時期には栗谷学派と退溪学派を問わず、変礼に対する関心が高まり、それが礼書の編纂をもたらしたことが窺われる。

申近<sup>シン・ジン</sup>の『疑礼類説』は、『朱子家礼』についての議論を項目化し、それに該当する中国と朝鮮の学者の見解を集めた著述である。朝鮮の学者のものとしては、晦齋李彦迪<sup>イ・オンジヨク</sup>、退溪李滉<sup>ソン・イン</sup>、頤庵宋寅<sup>ソン・イン</sup>、寒岡鄭述<sup>チョン・グ</sup>、愚伏鄭經世<sup>チョン・ギョンセ</sup>などの退溪学派の説を中心に整理し、巻九から巻十一にわたっては「国恤」・「君臣服」など邦国礼を取り扱っている。

朴聖源<sup>パク・ソンウォン</sup>の『礼疑類集』は、議論になっている主題を、『朱子家礼』の項目に従って分類・編輯した。これは李惟哲<sup>イ・ユチョル</sup>の『四礼集説』、金長生の『疑礼問解』、宋時烈の文集に載せられている礼に関する疑議、そして朴世采の『南溪先生礼説』の記事をまとめる形でできた本である。その特徴として挙げられるのは、冠礼と冠変礼、昏礼と昏変礼、喪礼と喪変礼、祭礼と祭変礼のように常礼と変礼とを同時に扱い、常礼の場合、国恤まで取り扱っている点である。

李宜朝<sup>イ・ウイジョ</sup>の『家礼増解』は、『朱子家礼』に記述のない「変礼」1898条目を採録・増補するとともに、『朱子家礼』の内容を「古礼」によって補完する意図から著述された。『朱子家礼』の該当箇所に対し、これほど多様かつ広範に変礼を収録したのは、いうまでもなく『朱子家礼』に明文規定がないため行礼の際に生じる困難に適切に対応し、行礼の便をはかるためである。『家礼増解』は、行礼の面においては『喪礼備要』を、考証と註解の面においては『家礼輯覧』を、変礼の分類整理の面では『疑礼問解』を集成した著述である。つまり、『家礼増解』は行礼、考証、変礼のすべてを具備している「朝鮮版の『家礼儀節』」であるといえよう。

柳長源<sup>ユ・ジャンウォン</sup>の『常変通攷』は、『朱子家礼』の編次に従って章節と条目を立て、古今の常礼と変礼を集めた著述である<sup>9</sup>。通礼・冠礼・昏礼・喪礼・祭礼の章のみならず、郷礼・学校礼・国恤礼・家礼考疑の章立てから構成される。このような構成は、家礼・郷礼・学校礼・邦国礼・王朝礼の体系からなる『儀礼経伝通解』によるものであるとともに、鄭述の『五先生礼説分類』の編纂方式を受け継ぐものでもある。またこの著述は、李象靖<sup>イ・サンジョン</sup>が『四礼常変通攷』において常礼と変礼を統合しながら、四礼を中心に整理しようとした問題意識を継承し、その規模と範囲を拡大したものであるともいえる。

## 2.4. 十九世紀

19世紀の『朱子家礼』関連著述は、合計102種（散佚した33種を含む）である。これらを表に整理すると、次のとおりである。

書名	著者(編者)	生年	没年	成書年代	巻冊	備考
家礼翼	黄徳吉	1748	1800	未詳		佚
四礼要儀	黄徳吉	1748	1800	未詳		佚
四礼祝辞常變通解	魏道憫	1763	1830	(1801)	1冊	叢書
式礼会統	洪養黙	1764	未詳	(1801)	2巻2冊	叢書
家祭雜儀	金漢星	1738	1802	未詳	1冊	

礼疑問答	丁若鏞	1762	1836	1805	3卷1冊	叢書
喪礼備要補	朴建中	1766	1841	(1806)	12卷8冊	叢書
家礼彙通	鄭煒	1740	1811	(1807)	8卷4冊	叢書
喪礼外編	丁若鏞	1762	1836	1809	6卷2冊	叢書
二礼抄	丁若鏞	1762	1836	1810	1冊	叢書
家礼証補	趙鎮球	1765	1815	(1810)	6卷2冊	叢書
喪祭輯笏	李亮淵	1771	1853	(1811)	2卷1冊	
大山先生喪祭礼問答	李象靖(柳炳文)	1711	1811	未詳		佚
礼疑類輯統編	吳載能	1732	未詳	(1812)	3卷4冊	叢書補
家礼攷訂	柳徽文	1773	1827	(1812)	2卷1冊	
四礼考証	柳泰春	1729	1814	未詳		佚
四礼家式	丁若鏞	1762	1836	1815	9卷	
儀礼九選	趙鎮球	1765	1815	未詳	15卷7冊	叢書
居喪篇	鄭象觀	1776	1820	(1816)	2卷1冊	
喪儀節要	丁若鏞	1762	1836	1817	6卷2冊	叢書
四礼考疑	許峻	1749	1817	未詳		佚
疑礼弁解	蔡著疇	1739	1819	未詳		佚
九峯瞥見	金禹沢	1743	1820	未詳	25卷13冊	叢書
祭儀集說	柳汝竜	1753	1821	未詳		佚
二礼輯略	權思学	1758	1832	(1823)	1卷1冊	叢書
備要撮略条解	朴建中	1766	1841	(1825)	4卷2冊	叢書
冠服考証	柳徽文	1773	1827	(1827)	2卷1冊	
四礼酌古	柳徽文	1773	1827	未詳		佚
東儒礼說	黃德吉	1750	1827	未詳		佚
改葬儀節	李以豊	1768	1827	未詳		佚
經礼答問	夏時賛	1750	1828	未詳		佚
八礼節要	夏時賛	1750	1828	未詳	2卷2冊	叢書
二礼演輯	禹德麟	1799	1875	1831	4卷4冊	叢書
居家雜服攷	朴珪寿	1808	1877	1832	3卷2冊	叢書
初終礼要覽	朴建中	1766	1841	(1832)	1冊	叢書
広礼覽	綏山	未詳	未詳	(1833)	3卷2冊	叢書
喪礼備要疑義	柳建休	1768	1834	未詳	1冊	
喪礼四箋	丁若鏞	1762	1836	1834	50卷17冊	叢書
喪祭証解	許備	1782	1835	未詳		佚
家礼輯解	柳致明	1777	1861	(1836)	8卷5冊	
儒礼編解	趙相憲	1808	1870	(1837)	2卷1冊	
四礼纂要	朴宗薰	1773	1841	未詳		佚
四礼通攷	鄭伯休	1781	1843	未詳		佚
郷礼志	徐有渠	1764	1845	未詳	5卷2冊	
喪祭撮要	張錫愚	1786	1846	未詳		佚
家礼後編	姜必孝	1764	1848	未詳		佚
二礼訂疑	姜必孝	1764	1848	未詳		佚
竹僑便覽	韓錫敷	1777	未詳	(1849)	10卷3冊	叢書

家礼酌通	沈宜徳	1775	1849	未詳	8巻4冊	叢書
喪祭儀輯録	金翊東	1793	1860	(1851)	6巻4冊	叢書
梅山先生礼説	洪直弼(?)	1776	1852	未詳	7巻4冊	叢書
礼説類輯	盧徳奎	1803	1869	(1853)	1冊(零)	
嘉礼備要	李亮淵	1771	1853	未詳	1冊	
常変輯要	権行夏	1815	1855	未詳	4巻2冊	佚
常変要覧	権行夏	1815	1855	未詳	4巻2冊	佚
常変纂要	朴宗喬	1789	1856	未詳	6巻3冊	叢書
礼説考	盧徳奎	1803	1869	(1857)	6巻3冊	
喪祭雜儀	朴箕寧	1779	1857	未詳		佚
士儀	許 伝	1797	1886	(1860)	25巻10冊	叢書
喪祭輯要(愚溪礼説)	姜 鈞	1819	1886	(1861)	2巻2冊	叢書
礼疑叢話	柳致明	1777	1861	未詳	47張	
礼説類編	李彙寧	1788	1861	未詳		佚
家礼輯解笏記	柳致明	1777	1861	未詳		佚
喪礼要解	崔祥純	1814	1865	(1863)	2巻2冊	叢書
滄海家範	王徳九	1788	1863	未詳	1冊	叢書
喪礼抄節	李漢膺	1778	1864	未詳		佚
四礼集説	崔祥純	1814	1865	未詳	4冊	佚
誦礼録	申錫愚	1805	1865	未詳	3冊	叢書
家礼補疑	張福枢	1815	1900	(1867)	5巻5冊	叢書
礼疑問答	宋来熙	1791	1867	未詳	3巻冊	叢書
儒礼編解	趙相徳	1808	1870	未詳	2巻	
四礼簡要	裴克紹	1819	1871	未詳	1冊	
礼疑纂輯	慎在哲	1803	1872	(1872)	2巻1冊	叢書
全礼類輯	柳疇睦	1813	1872	未詳	39巻	叢書
士儀節要	許 伝	1797	1886	[1873]	4巻2冊	叢書
礼家要覧	金道明	1803	1873	未詳		佚
四礼疑義或問	鄭載圭	1843	1911	(1875)	4巻2冊	叢書
四礼輯要	李震相	1818	1886	(1875)	16巻9冊	叢書
二礼祝式纂要	禹徳麟	1799	1875	未詳	1冊	叢書
四礼輯要	沈宜元	1806	未詳	(1876)	13巻8冊	
全斎先生礼説	任憲晦(田愚)	1811	1876	未詳	4巻2冊	叢書
喪祭雜儀	李彙廷	1799	1876	未詳		佚
家礼輯解笏記	柳致儼	1810	1876	未詳	2巻1冊	
常変纂要	鄭 矯	1799	1879	未詳		佚
賛祝考証	尹胃夏	1846	1906	(1881)	4巻2冊	
礼疑笏録	権重淵	1830	1883	未詳		佚
四礼通解	鄭致亀	1824	1884	未詳		佚
東礼経変	李鐸韶	1836	1885	未詳	5冊	佚
全礼類輯便攷	李鐸韶	1836	1885	未詳		佚
士儀鈔	趙性濂	1836	1886	未詳		佚
四礼集儀	朴文鎬	1846	1918	(1887)	10巻5冊	叢書

四礼常変纂要	金致珏	1796	未詳	(1888)	4巻2冊	叢書
礼疑続輯	李応辰	1817	1891	未詳	28巻15冊	叢書
四礼節略	都漢基	1836	1902	1892	1冊	叢書
四礼祝式	安秉珣	1839	1912	(1893)	1冊	叢書
祭礼通攷服制総要	柳重教	1832	1893	未詳	1冊	叢書
四礼笏記	柳重教	1832	1893	未詳	2巻1冊	叢書
常変輯略	権必迪	未詳	未詳	(1899)	6巻3冊	叢書
家祭儀	金興洛	1827	1899	未詳	1巻	
四礼文彙	申得求	1850	1900	未詳	2巻1冊	
四礼笏記	具 庠	1759	未詳	未詳	1冊	
士礼彙攷	咸鎮泰	1761	未詳	未詳	200巻78冊	佚
19世紀 総102種 (散佚33種)						

19世紀には『喪礼備要補』、『家礼証補』、『礼疑類輯続編』、『礼疑続輯』のように、18世紀に集成した礼書を補う作業が行われる一方、『四礼家式』、『常変纂要』、『士儀節要』のように、「節要本」あるいは「行礼書」を作成し、礼教の普及に務めた時期である。このような傾向は、行礼と考証および変礼について万全たる礼書はすでに18世紀において備わったという認識に基づくものと考えられる<sup>10</sup>。

### 3. 朝鮮時代における『朱子家礼』研究の特徴<sup>11</sup>

朝鮮時代の『朱子家礼』研究著述は、15～16世紀に62種 (散佚31種)、17世紀に82種 (散佚39種)、18世紀に97種 (散佚42種)、19世紀に102種 (散佚33種)、20世紀に83種 (散佚31種)、年代未詳資料28種 (散佚12種) の、総計454種 (散佚188種) である。これらの研究にみられる特徴は次の五点にまとめられる。

一、『朱子家礼』を古礼の精神によって補おうとする意識は、性理大本『朱子家礼』と『儀礼経伝通解』の普及・拡散によって促され、本格的な研究が始まった16世紀後半からその研究が集大成される18世紀後半にいたるまで、時期的な差はあるものの、退溪学派と栗谷学派の両方に共通してみられる。

二、16世紀後半には喪礼・祭礼を中心に「行礼」のマニュアルを定めようとする基礎作業が行われる一方、「問答」類の著述と「注釈」類の著述を通じて『朱子家礼』についての理解が深まる。行礼については『奉先雜儀』・「祭儀鈔」・「奉先諸規」をへて『喪礼備要』において整理が行われ、専門的な注釈は『喪礼考証』・『家礼註説』をへて『家礼輯覧』において総括される。

三、17世紀には退溪学派・栗谷学派を問わず、基礎的な性格をもつ喪・祭礼の指針書の出現は見られなくなり、注解と考証に重点をおいた専門的な注釈書が集中的に現れる。それと共に「疑礼」(行礼の際に生じる疑問事項)の問題をはじめ、「変礼」(『朱子家礼』に明文規定がないため、礼の精神にもとづいて規定を定めること)の問題に対する研究が行われ、独自の礼書として編纂・刊行された。

四、18世紀には、疑礼と変礼に対する研究成果が、参照の便をはかり分類の形式で編



纂・集成されるか、註釈書として著された礼書のなかに編入される様相を呈する。それとともに、栗谷学派・退溪学派の両方において、「行礼」・「註釈」・「変礼」の三つの方面について以前の研究を集成する著述が現れる。変礼書としては『礼疑類集』と『疑礼類説』が、行礼書としては『四礼便覧』と『家礼輯要』が、註釈書としては『家礼増解』と『常変通攷』が、それぞれ栗谷学派と退溪学派に属するものである。

五、19世紀と20世紀は、『喪礼備要補』・『家礼増補』・『礼疑類集続編』のような、18世紀に集成された礼書を補う作業が進められる一方、『四礼家式』・『常変纂要』・『士儀節要』のように、節要本または行礼書を具備し、礼教の普及に尽力した時期である。

以上の時期別の特徴から、朝鮮礼学史の展開に関し、以下の二点が確認できる。

第一に、朝鮮における礼学の展開は、『朱子家礼』の研究が始まった16世紀後半から18世紀にいたるまで、「古礼による『朱子家礼』の補完」という共通の問題意識を持ちつつ、学派の相違を超えて「蓄積的に進展された単一な流れ」であるということである。

朝鮮における『朱子家礼』研究は、性理大全本『朱子家礼』と『儀礼経伝通解』および『家礼儀節』の普及と拡散によって促され、その過程で生じた問題意識を共有していた。すなわち、①性理大全本『朱子家礼』（喪礼・弔奠轉）に引用される「『家礼』は朱子の初年作であり、晩年の説を正しいものとすべきである」とする朱子の弟子楊復の見解、②『儀礼経伝通解』において「古礼によって『家礼』を補完」しようとした朱子晩年の見解、③『家礼儀節』の「古礼と北宋当時の礼制によって『朱子家礼』を補完」しようとする立場が認識され、問題化されたのである。要するに、朝鮮における礼学研究は、17世紀以後というより、その当初から『朱子家礼』を標準としながらも、古礼の理念によってそれを補完しようとする意識のもとで行われたのである。

第二に、朝鮮において『朱子家礼』を中心とする礼学研究は、16世紀後半以後に本格化し、17世紀を経て18世紀後半にいたって満開開花する、ということである。続く19世紀と20世紀においては、18世紀に集成された礼書を補う作業が行われると同時に、その節要本、またはそれに基づく行礼書が作られたりすることも、礼学史において18世紀が占める位置を明確に示すものであろう。

朝鮮の『朱子家礼』研究は、16世紀後半以後、「行礼」の研究から始まり、「註釈」と「変礼」の領域へと拡大していく。行礼書の例をあげると、16世紀における行礼書の問題意識と省察は『喪礼備要』にまとめられ、17世紀に『三礼儀』に発展し、18世紀に『四礼便覧』・『家礼輯要』において集成される、という流れで展開される。『喪礼備要』は喪礼が中心で、祭礼については若干の言及があるのみであるが、『三礼儀』では冠礼・昏礼・祭礼にまで内容が拡充される。『四礼便覧』と『家礼輯要』はそれぞれ栗谷学派と退溪学派の代表的な行礼書であるが、いずれも『喪礼備要』の問題意識を継承、補完するものである。これと同様に、註釈書の場合も、17世紀には『家礼源流』（栗谷学派）と『喪礼考証』『礼記喪礼分類』（退溪学派）に展開し、18世紀には『家礼増解』（栗谷学派）と『常変通攷』（退溪学派）の形で集成される様相を呈する。

ちなみに、中国と日本には存在しない七巻本の『朱子家礼』、すなわち「戊申字本」という新しいテキストが朝鮮で作られたのも18世紀後半のことである。また国家典礼書の例をあげると、15世紀後半にできた『経国大典』・『国朝五礼儀』を全面的に改修し、『続大典』・『続五礼儀』・『国朝喪礼補編』を編纂したのも、18世紀後半であった。このようなこ

とを考えあわせると、「礼学の時代」は17世紀というより、18世紀後半以後という結論に達する。

以上の二点は、「17世紀礼学時代論」という前提のもとで進められてきた従来の研究に対し、批判的な問題提起をする。例えば、「経学的な相違」に注目し、退溪学派を「古礼中心」、栗谷学派を「朱子家礼中心」と決めつける見解は、次の事実によって反駁される。すなわち、退溪学派においても17世紀から18世紀にかけて『朱子家礼』註釈書が多く作られ、また栗谷学派においても『喪礼備要』・『家礼源流』のような、内容的に古礼を重視する一連の著述が存在していることである。

また「古礼中心的」対「時俗許容的」、あるいは「義理的傾向」対「功利的傾向」という、「礼学の相違」を基準に学派を区分する見解も直ちに反駁される。そもそも「時俗許容的」あるいは「功利的傾向」という判定は、中国と異なる朝鮮という時空に適するように、礼の原理に基づいて礼の表現形式を変化させたことを言い表したものに他ならない。また「礼は時が最も重要である」(礼、時為大)というのも制礼の原則であるから、「時俗許容的」「功利的傾向」という性格があるからといって、直ちにそれが制礼の原則を逸脱するものとなるわけでもない。朝鮮の時俗を反映し礼制を定めようとする試み、「変礼」への関心と研究は、『退溪先生喪祭礼答問』をはじめとし、『疑礼問解』・『家礼増解』・『常変通攷』などの著述を通じて、時期と学派を問わず、共通して見られる現象である。

さらにいえば、以上の二点は、「17世紀礼学時代論」を批判的に検討した先行研究が、まだ朝鮮礼学史を通時的に把握する視点を提示していない現状において、朝鮮礼学史研究に新たな突破口をもたらすものとなる。つまり、朝鮮礼学史の展開は、17世紀というよりは18世紀がその頂点であり、学派の相違を超えて同じ問題意識のもとで蓄積的に進展された単一な流れである、という新たな視点で把握することができる。

朝鮮礼学史の展開を「学派の相違を超え、同じ問題意識のもとで蓄積的に進展された単一な流れ」として捉えるとき、次のようなことが問題点として挙げられるかも知れない。すなわち、16・17世紀にはそれほど明確でないが、18世紀には行礼・註釈・変礼の三分野にわたり、退溪学派と栗谷学派がそれぞれ独立した形で著述を出していることである。このようなことは、礼学史を「学派の分岐に焦点をあてて相互対立している構図」と捉える従来の観点をより強く裏づけるものとみなされるかも知れない。

このような問題に対し、18世紀の礼書に引用されるそれ以前の朝鮮の学者の著述を検討・分析することは、問題を解決するうえで重要な手がかりを与えてくれると思われる。例えば、栗谷学派の代表的な礼書である『家礼増解』には、中国の著述28種のほか、『晦斎文集』、『奉先雜儀』、『河西文集』、『退溪文集』、『頤庵文集』、『高峰文集』、『栗谷文集』など、朝鮮の著述48種が引用されている。特に『家礼増解』は宋翼弼、金長生、李珥、宋時烈、權尚夏、朴世采、宋能相のような、栗谷学派の代表的な礼学者たちの礼説に対しても、門戸意識に拘らず、批判的検討を行っている。一方、退溪学派の代表的な礼書である『常變通攷』の場合も、『家礼考証』、『五先生礼説分類』などの退溪学派の成果はもちろん、『家礼輯覽』、『喪礼備要』、『疑礼問解』、『疑礼問答』などの栗谷学派の礼学の成果をも積極的に吸収している。つまり、『家礼増解』と『常變通攷』のいずれも、学派にとらわれず、それ以前の礼学の研究成果を反映、省察しているのである。

さらに例をあげるならば、18世紀に撰述された李緯の『四礼便覽』は栗谷学派を代表す

る行礼書であり、鄭重器の『家礼輯要』は退溪学派を代表する行礼書である。同じ性格の礼書が、各学派において同時期に出現することは、表面上、学派の門戸意識が強く働いた結果のようにも見える。しかし『家礼輯要』は金長生の『喪礼備要』の問題意識を継承・補完しようとする意図から著されたものであり、この点で『四礼便覧』とさほど差がない。すると、この問題は正反対に解釈される。つまり、16世紀末に喪・祭礼の標準的な儀式を定めるために著述された『喪礼備要』の問題意識が、18世紀の栗谷学派と退溪学派において『四礼便覧』と『家礼輯要』として整理された、というふうに解釈できるのである。

このようなことは18世紀に限らない。17世紀に撰述された兪槩の『家礼源流』は、『朱子家礼』の淵源（源）と展開（流）を明らかにしたものである。これは、『儀礼』『礼記』『周礼』などの様々な経伝から『朱子家礼』の淵源を探るとともに、後世の礼説を蒐集し、『朱子家礼』の展開を解明しようとした栗谷学派の代表的な礼書であった。しかし、この本は『経国大典』、『五礼儀』、『奉先雜儀』、『退溪先生喪祭礼答問』、『栗谷集』、『亀峰集』、『家礼考証』、『喪礼備要』、『家礼輯覧』、『疑礼問解』などの、それまでの朝鮮儒者の研究成果を、学派を区別せず反映している。しかも「『朱子家礼』の淵源を古礼に求める」という問題意識は、退溪学派である金誠一の『喪礼考証』と柳成竜の『喪礼考証』、鄭述の『礼記喪礼分類』を継承するもので、研究の範囲を『儀礼』『礼記』『周礼』と朝鮮儒者の解釈にまで拡張していったのである。

以上のように、朝鮮儒者の礼書編纂における問題意識や引用書目を分析すれば、朝鮮礼学史は表面的には学派・門戸の意識があるものの、その深層においては、両学派は互いに影響しあいながら研究の蓄積が進んだことが明らかになる。現象的には多様に変奏されているが、その変奏には一つの主調が貫流しているのである。

#### 4. 結語：朝鮮礼学史研究のための提案

朝鮮礼学史が学派の相違を超え蓄積的に進展したことをより鮮明にするためには、礼書編纂における問題意識や引用書目の分析にとどまらず、礼書の記事に即し、その「蓄積」の具体的な様相を実証的に検証して行く必要がある。各礼書の内容の分析と比較を通じて、様々な礼説がどのように継承、あるいは克服されていったのかを明らかにしなければならぬ。そのためには、まず『朱子家礼』の研究が本格化する16世紀後半から20世紀まで行われてきた朝鮮儒者の家礼研究の成果を収集・網羅する作業、つまり『家礼大全（仮称）』<sup>12</sup>を集成することが、現段階において唯一かつ最も有効な方法であると思われる。

具体的にいえば、『家礼大全』は『朱子家礼』の本文と原註および附註に対する、朝鮮儒者の註釈を集めた「集註」と、各条目の末尾に「変礼集成」を付した体裁をとる。「集註」は本文に対する朝鮮儒者の考証と註釈を集めるもので、「変礼集成」は『朱子家礼』を施行する過程で提起された疑問事項（疑文）と、『朱子家礼』に明文規定がないため義理によって解釈し（義起）、新たに礼制を定める（変礼）問題に関する、朝鮮儒者の問答と討論を集成するものである。前者は主に「考証」「註解」「註説」の題目の著述がその対象となり、後者は主に「問答」「問解」「或問」「筭疑」の題目の著述がその対象となる。

『家礼大全』は『朱子家礼』の条目とそれに関連する朝鮮儒者の註釈を、時期別に分け

て収録する。後代の礼書において繰り返し引用される前代学者の論述は、その元となる著述名を示したうえ、再引用のものは註釈の後ろにある「( )」の中にその書名を時代順に記す。

以上のような構成と内容を持つ『家礼大全』を作ることには、三つの意義がある。

一、『朱子家礼』が朝鮮社会において実施された実態とその変化の様子を、16世紀から20世紀にいたるまでの長期間にわたり、かつ全国的規模で調査できる基礎資料が得られる。これを通して儒教国家として朝鮮が到達した、礼治文化の実状を具体的、体系的に把握することが可能となる。

二、歴史上議論となった礼説に対し、地域別・学派別の異同、その時代的な変遷、相互交錯する様子を明らかにすることができる。特に『朱子家礼』の内容だけでは解決できなかった変礼の議論を、項目別に分類・収録することによって、『朱子家礼』が朝鮮化する様相を考察するための基礎資料が構築される。

三、今後、中国・日本・ベトナムなどの、前近代の東アジア各地における家礼文化の比較研究の基礎資料として活用できる。これは国家という境界を超えて東アジア社会の文化的特質を解明するとともに、西洋の伝統文化との対比から、東アジア伝統文化が成就したもう一つの普遍的な価値を発見しうる窓口となろう。

## 註

- 1) 張東宇「『朱子家礼』の受容と普及—東伝版本の問題を中心に」(『朱子家礼と東アジアの文化交渉』汲古書院、2012年)を参照。
- 2) チェ・ギョング崔敬勳『朝鮮時代 刊行의 朱子 著述과 註釈書의 編纂』慶北大学校大学院硕士学位論文、2008年、28頁。
- 3) イ・ボンギョ李倬珪「実学의 礼論」『韓国思想史学』第24輯、韓国思想史学会、2005年。
- 4) 以下の分析は拙論「家礼 註釈書を 통해 본 朝鮮 礼学의 進展過程」(『東洋哲学』韓国東洋哲学会、2010年)をもとに修正、補完したものである。
- 5) 本稿の礼書目録作成の際に参考になった研究としては以下のものが挙げられる。  
チャン・インギョン張仁経『奎章閣韓国本礼書研究』梨花女子大学校硕士学位论文論文、1983年。ファン・ヨンファン黃永煥『朝鮮朝 礼書의 發展에 관한 研究』清州大学校硕士学位论文論文、1995年。コ・ヨンジン高英津『朝鮮中期礼学思想史』ハンギルサ(한길사)、1996年。ナム・ジエジュ崔敬勳『朝鮮時代 刊行의 朱子 著述과 註釈書의 編纂』慶北大学校硕士学位论文論文、2008年。ナム・ジエジュ南在珠『朝鮮後期 礼学의 地域的 展開 様相 研究』慶星大学校博士学位論文、2012年。
- 6) 成書年代欄は基本的に著述年度を書いた。著述年度が不明である場合は序文か跋文の年記(丸括弧)、あるいは刊行年(角括弧)を書いたが、これらの年度はすべて著者の在世期間に限定した。既存の研究において合理的に推定された著述年度がある場合は、「年度？」で表示した。成書年代が確認できない場合、著者の死後に書物として編集・刊行された場合のいずれも、著者の没年を基準に配列した。このように配列したのは、本稿の目的が、書物としての家礼関連著述の普及・拡散する様相を解明するというより、各時代に現れる著者の問題意識や著述の体裁を考察するところであり、

各著述の成立年代を可能な限り時代順に配列する必要があったからである。

- 7) 備考欄に「叢書」あるいは「叢書補」と示したのは、慶星大学校韓国学研究所編『韓国礼学叢書』（民族文化社、2011年）に影印収録された資料を指す。『韓国礼学叢書』は1550年から1936年に至るまでの、朝鮮の礼学関連著述176種を解題し、収録している。補遺16冊を含め合計138冊の膨大な分量である。
- 8) <sup>ハン・ジェウン</sup>韓在堦『退溪 礼学思想 研究』高麗大学校博士学位論文、2011年を参照。
- 9) <sup>クォン・ジンホ</sup>権鎮浩「嶺南学派における『朱子家礼』の受容」『朱子家礼と東アジアの文化交渉』、汲古書院、2012年を参照。
- 10) 20世紀における『朱子家礼』関連著述は合計83種（散佚31種）である。

書名	著者(編者)	生年	没年	成書年代	巻冊	備考
増補四礼便覧	黄泌秀	1842	1914	(1900)	8巻4冊	叢書
冠服輯説	都漢基	1836	1902	未詳		佚
通攷二礼纂要	李秀栄	1845	1916	(1903)	8巻4冊	佚
儀礼集伝	張錫英	1815	1926	(1904)	17巻9冊	叢書
常体便覧	盧相稷	1854	1931	(1904)	5巻2冊	叢書
臨事便攷	李明宇	1836	1904	未詳	1巻1冊	叢書
四礼要選	洪在寛	1874	1949	(1905)	8巻2冊	叢書
家礼変儀	金啓運	1845	1907	未詳	8巻4冊	
誦礼輯要	尹禹学	1852	1930	(1909)	10巻5冊	
喪祭類抄	黄泌秀	1842	1914	(1911)	1冊	叢書
士礼通攷	徐廷玉	1843	1921	(1911)	9巻7冊	
喪礼要抄	崔東翼	1868	1912	未詳		佚
家郷彙儀	李鍾弘	1879	1936	(1913)	1冊	叢書
初終疑義	琴海圭	1861	1914	未詳		佚
懸吐詳註喪祭類抄	黄泌秀	1842	1914	未詳	1冊	叢書
家礼補疑別集	崔憲植	1846	1915	未詳		佚
家礼補疑	崔憲植	1846	1915	未詳		佚
家礼増説	崔憲植	1846	1915	未詳		佚
四礼考証	張升沢	1838	1916	未詳		佚
疑礼攷正	鄭来源	1845	1916	未詳		佚
九礼笏記	張錫英	1851	1926	(1916)	1冊	叢書
聞韶家礼	金秉宗	1871	1931	(1916)	8巻2冊	叢書
喪祭礼抄	姜夏馨	1861	未詳	[1916]	1冊	叢書
補遺喪祭礼抄	白斗鏞	1872	1935	(1917)	1冊	叢書
告祝輯覧	朴政陽	未詳	未詳	[1917]	1冊	叢書
喪祭撮要	諸慶根	1842	1918	未詳		佚
疑礼証解	諸慶根	1842	1918	未詳		佚
六礼笏記	郭鍾錫	1846	1919	未詳	1冊	叢書
礼疑問答類編	郭鍾錫	1846	1919	未詳	10巻3冊	叢書
六礼修略	宋浚弼	1869	1943	(1920)	10巻5冊	叢書
三礼唱笏	未詳	未詳	未詳	[1920]	3巻1冊	
家礼笏疑	金在洛	1858	1920	未詳		佚

常変祝辞類輯	金在洪	1867	1939	(1921)	8卷3冊	叢書
良斎先生礼説	田 愚	1841	1922	未詳	5卷5冊	叢書
続四礼傲略	朴升東	1847	1922	未詳	4卷	佚
閨門軌節	王性淳	1868	1923	未詳	1冊	
四礼汰記	張錫英	1851	1926	(1923)	6卷2冊	叢書
四礼要覧	具述書	未詳	未詳	(1923)	4卷4冊	叢書
四礼儀	鄭 琦	1878	1950	(1924)	6卷1冊	叢書
家郷二礼参考略	李鉦均	1855	1927	(1924)	1冊	叢書
現行四礼儀節	高裕相	未詳	未詳	[1924]	1冊	
朝漢四礼十三節	李升洛	未詳	未詳	(1925)	1冊	叢書
昏礼簡要	李光昱	1860	未詳	(1926)	1冊	
諺文喪礼	金東縉	未詳	未詳	(1926)	1冊	叢書
四礼節要	張錫英	1851	1926	未詳	1冊	
四礼常変祝辞	全達準	未詳	未詳	(1927)	1冊	叢書
三菴疑礼輯略	尹健厚	未詳	未詳	(1928)	3卷2冊	叢書
四礼纂笏	金在洪	1867	1939	[1928]	4卷2冊	叢書
百礼祝輯	徐雨錫	未詳	未詳	(1929)	1冊	
四礼輯略	金世洛	1854	1929	未詳		佚
四礼要覧	洪在謙	1850	1930	未詳	1冊	
常変撮要	洪在謙	1850	1930	未詳	2冊	佚
士礼要儀	趙曷奎	1846	1931	(1930)	2卷1冊	叢書
礼笏	宋在奎	未詳	未詳	(1931)	9卷1冊	叢書
深衣考証	盧相稷	1855	1931	未詳	1冊	叢書
四礼酌彙	蔡星源	1870	1932	未詳		佚
儀礼準則	朝鮮總督府(慶尚南道)			1934	1冊	
常変要義	安鼎呂	1871	1939	(1934)	4卷2冊	叢書
新定五服図	権相翊	1863	1934	未詳		佚
冠礼儀抄	権相翊	1863	1934	未詳		佚
儀礼軌範	未詳(忠清南道)			[1935]	1冊	
常変祝輯合編	鄭 琦	1878	1950	(1936)	1冊	叢書
疑礼考証	金相項	1857	1936	未詳		佚
礼賓笏記	崔鶴吉	1862	1936	未詳		佚
廟儀	李鍾弘	1879	1936	未詳	1冊	叢書
儀礼要覧	未詳	未詳	未詳	[1937]	1冊	
儀礼備要	金鎮孝	1888	未詳	(1938)	1冊	
常変要解	柳淵龜	1861	1938	未詳		佚
喪礼疑弁	金容輅	1862	1939	未詳		佚
二礼通編	張相学	1872	1940	未詳		佚
退溪寒岡星湖三先生礼説類輯	盧相益	1849	1941	未詳	5卷2冊	
四礼要式	金碩林	1859	1941	未詳		佚
三礼通纂	宋鴻訥	1878	1944	未詳		佚
八礼輯要	李貞基	1872	1945	未詳		佚
四礼疑変	李寿弼	1864	1946	未詳		佚

## 張東宇「朝鮮における『朱子家礼』研究」

家礼補闕	張允相	1868	1946	未詳		叢書
礼疑問難	姜台秀	1872	1949	未詳		佚
四礼抄略	柳璋植	1875	1949	未詳		佚
四礼節要	李宗基	1900	1970	(1951)		
四礼提要	柳永善	1893	1960	未詳	2卷1冊	叢書
四礼受用	金 槐	1896	1978	未詳		
四礼輯略	李義沢	1859	未詳	未詳		佚
常變郷約	張相貞	1873	未詳	未詳		佚
20世紀						総83種 (散佚31種)

## 【成書年代未詳資料】

書 名	著者(編者)	生年	没年	成書年代	卷冊	備考
古冠昏礼解	韓復行				1冊	叢書
四礼要覽	李宗九				1冊	叢書
四礼撮要	尹義培				5卷3冊	叢書
喪礼輯解	金恒穆				1冊	叢書
疑礼輯録	柳 激				3卷3冊	叢書
諸礼祝輯	李機衡				1冊	叢書
家礼便覧	未詳				1冊	叢書
緬礼備要	未詳				1冊	叢書
緬礼儀節	未詳				1冊	叢書
四礼釈疑	未詳				1冊	叢書
疑礼考微	未詳				1冊	叢書
二礼便考及別論	未詳				7卷3冊	叢書
二礼通攷	未詳				2卷2冊	叢書
従先録	未詳				1冊	叢書
四礼按	未詳				11卷11冊	叢書補
四礼節要抄	未詳				1冊	
家礼類編	金得老				6卷	佚
四礼問答	宋雲用					佚
四礼輯要	金晚惺子				2冊	佚
四礼抄要	金章煥					佚
四先生礼説分類	朴 洵				1冊	佚
喪礼纂要	李基発					佚
喪祭礼	安 璐					佚
喪祭雜儀	安 璐					佚
儀礼要覽	尹奭勲					佚
疑礼攷証	李在鈞					佚
家礼増解	未詳				8卷	佚
喪礼精選	未詳					佚
総28種 (散佚12種)						

- 11) 以下の分析は拙論「朝鮮時代の家礼を研究するための新しい視点と方法 (조선시대 가례 연구를 위한 새로운 시각과 방법)」(『韓国思想史学』韓国思想史学会、2011年)をもとに修正、補完したものである。
- 12) 『家礼大全』を集成する作業は2012年7月から韓国研究財団の支援で延世大学校国学研究院附設東アジア古典研究所において進められている。本作業は6年かけて行われる予定である。